

が、不明また都市偏重の検査が多い。)

二、測定の内容の理論的うらづけが不十分であること、また内容に、不満足のものが多いこと。(たとえば都会生活で経験する知識が問題の内容に多いものがある。)

三、施行の技術が、幼稚園や保育所の教職員にやや困難なこと。

四、子どもの自然性をとらえにくく、検査時の条件によって差が生じること。(たとえば言語検査において情緒や社会性の発達が不十分な幼児にこの弊害が多い。)

五、言葉によって教示するばあい、テストによって差が生じる危険があること。また採点法に曖昧なものがあり、主観によって採点結果が変化するおそれがあること。

六、練習効果のあがる内容が比較的多い。などがあげられる。

調査の結果、以上の項目のうち、二は学者が、三と四は幼稚園保育所の先生が、五と六は児童相談所のテストが、主として主張している。

以上のような欠点があるにもかかわらず、知能検査の重要性にたいする認識は、現在高上しつつあるようである。

その理由として、つぎの内容があげられる
(一) 近時児童相談や心理療法がさかんになってきたが、その基礎として知能検査の重要性が認識されてきたこと。

(二) 自由募集の小学校の入学試験や入園試験に、知能テストが使われること。(就学、就園試験は昭和二十七年頃からさかんになった)
(三) 指導要録に知能検査の結果を記録する欄があること。

(四) 近時特殊教育が問題にされはじめたが精神薄弱児の発見や診断に知能検査がたいせつなこと。

ただし、現在知能検査ブームは過ぎたという人がある。また形式的にテストをしたり、まちがった意味でテストを使っている者も少なくない。たとえば、先生から「もう知能検査は下火ではないのですか」というような言葉を、現在時折きくことがある。この言葉は、わが国の学校の教師が明治以来もった流行を追う軽薄な心理の一端をあらわすものである。すなわち、教育のなかに一種の流行があり、教師のうちのある人々は、一つの流行にたいして、熱にうかされたように大さわざするが、

(58頁につづく)

幼児の教育

第五十五卷第十一号

定価五十円

昭和三十一年十月二十五日印刷

昭和三十一年十一月 一 日

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館 にお願ひ致します。